春の舞踏

三浦哲郎

春の舞踏

三浦哲郎

文藝春秋

春の舞踏

昭和四十六年二月一日　第一刷
昭和四十六年八月二十日　第三刷

定価　五八〇円

著者　三浦哲郎

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
〒102
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷　図書印刷
製本　矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Tetsuo Miura 0093-301760-7384 Printed in Japan

春の舞踏　目次

序曲　5
声　27
音　38
左の闇　54
まぼろしの家　64
春愁　83
風　99
夜　115
男たちの道　142
影　166
朝の色　181
水銀灯　193

女の匂い 206
炎 220
北国にて 235
再会 251
秋の空 265
渦 280
道しるべ 299
鉛の腕 316
燃ゆる山 336
夜の駅 355
開幕の時 371

装幀 堀 文子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春の舞踏

序　曲

駅前で拾った車が、人通りの絶えた夜の街を走り抜けて、雪明かりの野に出ると、急にヘッドライトのなかに小雪が飛びちらっているのがみえた。

さっきまで熄んでいた雪が、またいつのまにか降り出している。凍てついた雪道を叩くタイヤの鎖の音が高くなった。

その音が、北国育ちの菊子の耳には懐かしく響いた。何年ぶりに聞く音だろうか。東京にも雪は降ることは降るが、北国育ちには綿アメのように他愛ない雪である。融けて、地肌の出たアスファルト道路に、ものものしく鎖の音を響かせながら行き交う車が、滑稽にみえる。

煖房のきいた車のなかには、男の髪の油の匂いがこもっていた。固いポマードの匂いである。菊子の好かない匂いである。菊子は、車に乗ったときから、その匂いに気がついていた。

前の客が残していったものだと思っていたら、そうではなかった。運転手の粋に傾けた帽子のかげが、すれちがう車のライトを浴びるたびに鈍くひかるのがみえる。

ちかごろ、都会では、ポマードで頭を固める若者がめっきりすくなくなっている。それは、東京で茶廊の雇われママをしている菊子がよく知っている。けれども、ここは都会からは遠かった。菊子の生まれ故郷の笠ノ津より、もっと北、もうほとんど本州の北端に近い。

おととい、菊子は死んだ母の三回忌の法事をしに、菩提寺のある笠ノ津に帰ってきた。下の妹の茜と、その下の妹の友絵も誘って、三人一緒に帰ってきた。

三人姉妹が一緒にふるさとに帰る機会は、この先もう当分こないかもしれない。ひょっとすると、これきり生涯こないかもしれない。菊子はそう口に出していったわけではなかったが、思いはおのずと二人の胸に通じたようである。二人は仕事のやりくりをつけて、一緒に笠ノ津へ帰るといった。

茜は、モダンバレエの踊り子をしている。

友絵は、商事会社のタイピストをしている。
法事は、きのう無事に済ませた。町の生家の造り酒屋はすでに破産して、いまは人手に渡っている。さみしい法事だったが、娘が三人揃ったことで母も満足してくれたろうと思う。
菊子は、法事を済ませたら、すぐまた三人一緒に東京へ戻るつもりであった。まさか、こんな北はずれの鷹ノ湯くんだりまでくることになるとは思わなかった。
鷹ノ湯は、湾の海べりにあるちいさな温泉町である。汽車の終点の港町から菊子とポマードの匂いを乗せた車は、いま雪明かりの道にタイヤの鎖をばりばりと響かせながら、鷹ノ湯に向って走っている。
菊子は、厭な匂いに酔いそうになって、ほんのすこし窓をおろした。きりきりと冷たい風が額に当る。ほんのすこしのつもりだったが、運転手はちょっと振り向いた。北国育ちは隙間風に敏感なのだ。
「暑いんかね」
「雪道には弱いの。開けて構わない？」
「ああ、いいですよ。こっちも開けようかね、寒くなかったら」
運転手がそういって、横の窓に手を伸ばしたとき、道の行手に赤い灯が揺れるのがみえた。
運転手は舌打ちして、スピードを落した。ヘッドライトの先に、黒い外套に身を固めた警官の姿が三つ四つ浮び上った。
赤いカンテラが揺れながら道を塞いでいる。
「まだやってやがる」
運転手が呟いた。
「なんなの？」
「検問だよ」
すると、ふと菊子のなかで、たじろぐものがあった。こういう検問は、東京でならなにも珍しいことではなかった。菊子もタクシーに乗っていて、何度か検問を受けた経験がある。やましいことはなにもしていないのだから、なにを訊かれても、平気で答える。
ところが、そのときの菊子は、そんないつもの平静さを、ふと見失っていた。
車が道ばたに寄って停まると、菊子は窓越しにきた強いひかりの棒に、いきなり顔を撫でられた。ドアが開いて冷たい風が吹きこんできた。「女だ」と気を許したよ

うな声がきこえた。
寒さに昂ぶった別の声が、運転手に行先を問い、菊子には、失礼しますといって住所、氏名、年齢を問うた。
東京都練馬区高松町一ノ三三九五高松荘・萩野菊子・二十七歳。
「ほう、東京の方ですか」
と警官はいった。
「お一人で？」
「……連れが、むこうで待っております」
そう答える前に、ほんのちょっとだけだが菊子が言い淀んだのには、理由があった。けれども、相手は菊子のためらいを、別の意味に受け取ったようだった。
「待ち合わせですか」
警官の声は緊張を欠いていた。
「お宿は？」
「北の家です」
警官は、御協力ありがとうと礼をいい、運転手に道が滑るから気をつけろよといって、ドアを閉めた。
なんのこともない。菊子は、さっき検問と聞いてたじろいだ自分が、おかしかった。
人目を忍んで誰かに会いにゆく——そのこと自体にはなんの罪もないのである。はらはらしているのは自分だけなのだ。
菊子は、家が破産して以来、債権者の目を逃れて姿をくらましている兄に逢いにいくところであった。兄の浩介は、いま鷹ノ湯温泉のどこか旅館の板場で働いているらしい。
「あいつ、まだ捕まってねえんだな」
ふいに運転手がそういった。
「なにか、あったの？」
「おととといの晩だったかな、芸者が殺されたんだよ、鷹ノ湯で」
菊子は驚いた。そんな殺伐な町にいるのか、兄は。
「怖いわ」
「怖いたって、もう済んじゃったことだ」と運転手がいった。「こんなこと、そういつもあるってわけじゃねえ。いつもは静かな温泉町ですよ。お客さんは悪いところへきちまったわけだ」
「……そうならいいんだけど」
「おかげで今夜は静かだよ、鷹ノ湯は。殺された芸者の

お通夜だっていうから。宴会もないし、ま、お客はゆっくり出来るさ」

そういう声の感じから、運転手がにやにや笑いをしているのが、菊子にはわかった。どうやら彼もさっきの警官とおなじように、菊子がいい男に会いにいくのだと思っているらしい。

兄も男には違いないが……と菊子はひとり苦笑を漏らした。

遠い記憶がよみがえってくる。佐久間周二と婚約していたころの記憶である。そのころ菊子は、まだ女子高校を出たばかりの内気な造り酒屋の娘であった。周二は町でも暖簾の古い呉服屋の次男で、東京の私立大学の学生であった。

婚約は、二人が親に申し出て結んだのではなかった。親同士が決めた縁談であった。笠ノ津は北上山系の山あいの、川に沿って細長く伸びている古い町である。町の大きな家には、いまだに子供の縁談は親が決める風習が残っている。

息子や娘が年頃になると、悪い虫がつかないうちに、さっさと手頃な相手と婚約を結んでしまう——そんな結婚の仕方に、菊子は別段、不服でもなかった。自分で好きな人を選んで、結婚する。そんな虫のいいことは、諦めていた。恋愛結婚など、よその世界の出来事である。好きな人がみつかっても、その人と結婚させて貰えるわけでもない。菊子は、人を好きになることを怖れていた。

ただ心配なのは、親が自分の好きになれそうな相手を選んでくれるかどうかということである。世の中には、どこといって欠点がなさそうなのに、なぜか好きになれない人間がいるものだ。虫が好かないという相手がいる。

親がそんな人を選んでくれたらどうしようかと、それがたった一つの心配だったが、相手が周二と決まって、菊子はほっとした。

周二は、菊子とおなじ中学の二年先輩であった。菊子が一年のときの三年生で、周二は生徒会の会長をしていた。女の生徒で周二に憧れる者が多かった。菊子もこわごわ憧れていた。

周二は、東京の大学生だったから、会えるのは休暇で帰省してきたときだけである。町では人目につくから、二人は近くの県庁のある市に出て逢っていた。

そのころ、こうして駅から車を駆って、周二が待って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いる公園へ駈けつけたことが、何度かある。そのときのことが、よみがえった。けれども、それももはや遠い記憶でしかない。

「だけど、愛欲のもつれってやつは、おそろしいもんだね」

ふいに運転手が、そういった。

愛欲のもつれなどと、週刊誌の見出しにでも出てくるような文句を、若い運転手がしたりげにいうのがおかしかった。

菊子が黙って笑っていると、

「こんどの鷹ノ湯の芸者殺しも、まあ、いってみればその愛欲のもつれがもとで起こったんだね」

「……相手はお客？」

「殺したやつかい？　そいつは旅館の板前でね」

菊子は、ぎくりとして、息を呑んだ。

「板前だから、庖丁でぶすっとやりそうなもんだけど」

運転手は、おもしろそうに話し続ける。

「ところが、猟銃で、ずどんとやった。よっぽど腕に覚えがあったんだね。ドアの隙間から銃の先だけ入れて、ずどん、それっきりだ。即死だって」

菊子は、子供のころ、空気銃を撃ちこんだリンゴを食べたことがある。そのときの記憶が、ひらめくようによみがえってきた。

兄の浩介に、樹に熟れているリンゴを撃ってとせがんだのは、ほかならぬ菊子自身であった。

（あの一番左の大きいのを撃って）

ばしっ、という鈍い銃声。撃ち落されたリンゴをかじっているうちに、かちっと歯に当った鉛の弾の、不思議な味。

まさかと思ったが、菊子は顔がひとりでにこわばってくるのを覚えた。

「その板前、幾つぐらいなの？」

「三十四、だったと思うけど」

浩介は、菊子より六つ年上だから、三十三のはずだった。近い。

「その人の名前、わかる？」

「さあてね。新聞には出てたんだけどな。なんでもピーチホテルってとこの板前だよ」

手紙には、住みこんでいる旅館の名までは書いてなかった。

浩介の手紙は、笠ノ津の寺の住職が預かっていてくれた。こんどの法事のためのお布施を送ってきた書留に同封されていたという、菊子あての手紙である。

「あなたにそっと渡してくれるようにと手紙に書いてありましたから、そっとお渡ししますよ」

住職は笑いながらそういって、本堂と庫裏をつないでいる渡り廊下の途中で、さりげなくその手紙を渡してくれた。菊子は、茜や友絵に気づかれぬよう、鐘楼のかげに逃れて、その手紙を読んだ。

「御苦労さん。寺に金を送ったから、よろしく頼む。おれはいま鷹ノ湯温泉で板前のようなことをしている。ひと晩、暇が作れるようなら、ひさしぶりで会わないか。鷹ノ湯の北の家という宿で、おかみに笠ノ津からきた妹だといってくれ。おかみにそういって置く」

鉛筆の走り書きで、そう書いてあった。

これでみると、浩介は北の家に住みこんでいるかのようだが、世間の目を逃れている彼が、自分の職場に平気で妹を呼ぶとは思えない。

ふいに、辺りがオレンジ色に明るんで、タイヤの鎖の音が反響した。

「このトンネルのむこうが鷹ノ湯だよ」

運転手がいった。

鷹ノ湯は、街道に軒を並べているどの旅館も暗く表戸を閉ざして、街灯の明るみに雪がひっそりと降りかかっていた。

「宿は北の家といったね。確か山の手だったな」

運転手が首をかしげるほどだから、人目につかないところにある古くてちいさな宿なのだろう。ホテルばやりのいまどき、なになに荘でも、館でもなく、北の家というのはいかにも古びた宿の感じがする。

車は、家が立て込んでいる横町に折れ、鉄道のガードをくぐって坂道にかかり、途中から左に折れて、じきに停まった。

「この辺りだったと思うけど」

「ありがとう。自分で探すわ」

金を払って降りてみると、道の右手の黒板塀の上に出ている灯を落した看板が、雪明かりで「北の家」と読めた。

菊子は、運転手の窓を指先で叩いて、頷いてみせた。

車は鎖をはためかせながら走り去った。

玄関に廻ってみると、思った通り待合ふうの、古びた、こぢんまりとした宿で、まるい軒燈の下で呼鈴を押すと、やがて、

「どなたでしょうか」

と、寂びた女の声があった。

「笠ノ津から参った者ですが、兄がこちらへ伺うようにと……」

短い沈黙があって、

「ああ。ちょっとお待ちを」

なかに灯が点いて、頭を古風な束髪に結った和服の老女が、戸を開けてくれた。菊子は、夜もすっかり遅くなってしまったことを詫びて、

「妹の菊子と申します」

「いらっしゃいまし。お兄さんから伺っております」

老女の色白のほそ面に、柔和な微笑が浮ぶのをみて、菊子はほっとした。

黒びかりする廊下を、奥まった部屋に案内された。出窓に近く鉄のちいさなストーブが置いてある。老女は改めて畳に膝を落して、挨拶をした。

「むこうの駅からお電話でもくだされば、お部屋を煖めて置きましたのに。すぐ火をお持ちします」

老女が部屋を出ていくと、じーんと耳鳴りがして、窓の外で猫がかぼそく鳴くのがきこえた。妹の自分を客扱いにするところをみると、兄はやはりこの家で働いているのではないのだと菊子は思った。ここから電話でもして、よその家から呼ぶのだろう。

老女が鉄の火入れに炭火を盛って戻ってきた。それを火箸で、一つずつストーヴのなかに落しながら、

「お兄さんは、もう小一時間ほどかかるそうですけど。先にお風呂にでもお入りになったら、いかがです？　出てらっしゃるころにはお部屋も煖まっておりましょう」

菊子はそうすることにして、老女のあとについて浴室に降りた。浴室だけは、温泉宿らしくひろびろとして、縁の低い浴槽から湯が溢れ出ていた。じっと軀を沈めていると、天井からタイルの床に落ちる水滴の音が高かった。

浴室から部屋に戻ってみると、ストーヴのそばに頭を角刈りにした男が一人、黒いジャンパーの背中をこちら

に向けて、あぐらをかいていた。
部屋に無断で男がきているとすれば、それは兄の浩介にちがいない。それなのに菊子は、入口の襖を開けてその後姿を目にした途端、とっさに部屋を間違えたと思って身を引いたのは、われながら解せない振舞であった。
男がゆっくり振り向いた。その顔をみて菊子はようやく、
「兄さん」
と声が出た。
「ああ、菊子……」と浩介がいった。「よくこんなところまでこられたな」
菊子はふいに、以前、笠ノ津の家にいたころ、兄の猫背をみるとなぜともなくそうしたくなったように、小走りに走り寄って両手でどすんと、どやしてやりたいという思いに駆られたが、いまは、そうすることが出来なかった。
「しばらく。元気？　病気しなかった？」
菊子はストーヴのそばの座布団に膝を折ると、浩介の顔をまじまじとみつめた。
「うん。この通りだ。なんとかやってる」
四年ぶりでみる兄は、髪のかたちが変ったせいか、顔がひとまわりちいさくみえた。相変らずの童顔だが、それだけに余計、眉の下や頬の辺りに不如意な暮しのやつれが目立った。
菊子は、剃りたてらしい兄のモミアゲの下のところに、ちいさな剃刀の傷あとをみつけたとき、急になにやら胸が詰まって、目に涙がこみ上げてきた。
あわてて、くすんと笑って、
「あたし、老けたでしょう？　こんなに早くくるんだったら、お風呂場で小皺を隠してくるんだったのに」
くすくす笑い続けて、畳んだタオルで顔の汗を叩くようにしながら、菊子はそっと目頭をおさえた。
浩介は、ふとうしろを振り向いて、
「誰か、一緒なのか」
みると、入口の襖が閉め忘れたままで、あら、ごめんなさいと菊子は立っていきながら、
「ここへきたのは、あたし独り。でも、笠ノ津へは三人一緒に帰ったわ」
「……そうか」
と浩介は呟くようにいった。

「もう当分帰ってこれそうもないから、最後の晩だけ、めいめい勝手に好きなところへいって、好きなように過ごすことにしたの」

浩介は黙って頷いている。

「ところが、ここへくる車のなかで、びっくり。芸者が撃たれたんですって？」

「うん。今夜がお通夜だった」

「そうですってね。板前の人が」

といいかけて、あとは口を噤んでいると、浩介はふっと苦笑を浮べて菊子をみた。

「おまえ、俺が撃ったと思ったのか」

菊子は、そういう兄をいたわるように、黙って笑い返した。

おなじ夜。

笠ノ津では、夕刻にはもう雪が霽れ、おそくなって、流れはじめた雲の切れ間から月が洩れてきた。

町の裏山の中腹にある寺に、独り居残った茜は、本堂の入口の階段に腰をおろして、境内に降り積んだ雪が急に蒼ざめたり、やがてまた、みるみる白い耀きを取り戻したりするのを眺めていた。

辺りには寒気が張り詰めていて、自分の吐く息がまるで煙草のけむりのようにみえる。手の指先と、トウシューズの爪先とが、しびれたように感覚が薄れている。

けれども、茜は別に寒いとは思わなかった。顔や首筋が汗ばんでいた。セーターの胸も、タイツの脚も火照っていた。

両手に息を吐きかけては、こすり合わせていると、山門のむこうから、長い石段をゆっくり登ってくる足音がきこえてきた。雪下駄の歯に打ちつけてある滑り止めの金具の音が、かちっ、かちっと、杉木立のなかに冴えている。

やがて、歯の間に詰まった雪を落すのだろう、こんこんと、山門の柱を下駄で蹴る音がして、急に明るんだ雪の上に、住職の濃い影が落ちた。

町の檀家で酒でもよばれてきたのだろうか。住職は、足の運びが心もとなくなっている。なにかぶつぶつと独り言を呟きながら、石畳の道の途中から庫裏の方へ折れるとき、片足を宙に浮かして、よろめいた。

「お帰りなさい、和尚さん。大丈夫ですか？」

茜は立ち上って声をかけた。
住職はびっくりしたように立ち止まり、こっちの暗がりに目を凝らして、
「……茜さん？」
「そうですよ」
「そんなとこにいなすったのか。や、ただいま戻りました」
「ふらふらしてらっしゃるわ。お酒を召し上ったんでしょう？」
「般若湯、といって頂きたいですな」
といって住職は笑った。
「いかにも、少々頂戴してきましたが、どうもこの石段がいけません。若い時分は、庫裏へ入るまでしゃんとしていたもんですがな。近頃は、石段を登りきって、山門をくぐると、途端に酔いを発します。玄関までが年々遠くなってきて……あなたは、そんなところでなにをしていなさった」
「ちょっと汗をかいてたんです」
「ほう、汗を」
「二日も動かないでいると、なんか軀の調子がおかしくなるんですよ。軀のふしぶしに垢が溜まったみたいで、気持が悪くって」
「なるほど……それで、そこで踊りを踊っていなすったのか」
「……いけなかったかしら、こんな場所で」
「いやいや、それは一向に構いませぬが……これは、しもうたことをしたな。もうすこし早く戻るんだった。あなたの踊りは、ときたまテレビで拝見するが、テレビだとどうも別人のようにみえましてな。いちどこの目で、とっくり拝見したいと思うとったが、惜しいことをしました」
汗をかいたまま、いつまでもそんなところにいると風邪をひきますよといい残して、住職がまた千鳥足で玄関の方へいくのを見送ると、茜も暗い本堂を小走りに抜けて、渡り廊下から庫裏に戻った。
すると、客間へいく廊下の途中の、音を絞ったテレビの色が蒼白く障子に映っている部屋から、中学生ぐらいの小坊主が顔を覗かせて、
「お風呂が沸いてますけど」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com